

「第68回 日本病院学会」に参加して



学会参加者

6月28日(木)～29日(金)の2日間の日程で、北陸金沢において「第68回日本病院学会」が開催されました。今年も病院長をはじめ、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、事務員など、総勢15名のスタッフが参加しました。この学会は、医療職の学術大会とは異なり、医療機関で活動する全職種の方々が参加し、日頃の研究や業務改善の成果、課題に対する取り組みなどの発表を通じて、医療の質や病院運営の改善に寄与するための学びの場となっています。

今年のテーマは「医療制度ルネサンス

医療事務部 医事企画課
課長 西田 雄司



「未来を見据え、今を革新する」であり、シンポジウムやワークショップに加え、全国からの参加者による600題を超える口演発表やポスター発表が行われました。

当院は第64回以降、毎年多職種複数名で参加しています。今年も一般口演9題、ポスター発表1題の演題を提出し、当院での日頃の取り組みや成果の報告を行いました。発表者は半年以上の期間を準備に費やし、意見交換を繰り返しながら磨きをかけ、当日の発表では準備の成果を十分に発揮できました。

この学会では、医療の質の向上をはじめ、病院運営や人材育成・多職種連携に関する演題が多く取り扱われています。近年では、災害対策への取り組み報告なども行われるようになってきており、全国の医療機関がどのようなことに着目して

いるかが反映されています。

現在、2025年に向け、「病床機能の分化、連携・地域包括ケアシステム構築の推進・在宅医療の充実」を目指した医療制度改革が次々に進められており、医療の提供体制も「病院完結型」から「地域完結型」へ変化しています。

地域住民に必要なとされる病院を目指すためには、数多くの専門職の集合体である病院事業を総合的に捉え、将来を見据えた取り組みを行う能力が必要不可欠であると思います。

今回の学会発表を通じて、他の医療機関から評価される経験により、参加者のモチベーションは大きく向上し、自らが「何をすればより良い病院になるか」を考えるきっかけになりました。学会で得られた経験を今後の業務に活かし、更なる取り組みにチャレンジしてまいります。

「第28回 全国病児保育研究大会 inかがわ」参加報告



発表ポスターの前にて

7月15日(日)、16日(月・祝)の2日間にわたり、サポート高松にて「第28回 全国病児保育研究大会 inかがわ～病児保育はいつもそこに在る～」が開催され、松山市民病院からは医師・看護師・事務スタッフ・保育士の総勢11名で参加しました。

この大会は、658施設(愛媛県は13施設)が加盟する一般社団法人全国病児保育協議会主催で行われ、テーマには「病児保育は地域の中で安心感をもたらし、日々の生活の中で親子を支える居場所として存在する」という思いが込められています。

大会は、すぐに役立ち実践に生かせる内容から、病児保育の新たな可能性に至

る内容まで、多彩なプログラムで構成された充実したものでした。中でも、一般演題における「産後うつ病を呈した母親への支援」や「医療的ケア児の受け入れ」、「育児クラスの実施」に関する報告では、病児保育施設を子育て支援の場として提供する積極的な姿勢を学ぶことができました。

当院の病児保育「アイビー」からは、「病院併設型病児保育における課題について」と題し、利用者・病院職員に実施したアンケート調査に基づき、利用者の要望・満足度、病院職員の病児保育に対する考え・求めていること、今後私たちが取り組んでいくことについてポスター発表を行いました。医療の視点を踏まえ、併設型の強みを生かした保育を行っていることを伝えました。会場からは「病院主導で病児保育を立ち上げていること」と「小児科の全面協力を得て運営していること」への高い評価をいただきました。私たちに

保育管理課(保育士) 矢野 公仁子

とにより、客観的な視点で保育を見つめ直す機会となりました。

開所から11カ月が過ぎ、延べ943名の方に利用していただきました。職員の利用は、全体の30%ですが、少しずつ地域の中の病児保育施設として、認知されてきているように思います。

今回学んだこと・感じたことを今後の業務に活かし、安心できる松山市民病院的病児保育室として、地域や病院職員の子育て支援につなげていけるように努力していきたいと思います。



学会参加者(筆者は後方右から3人目)